

臨床検査データからみたC型慢性活動性肝炎における新しいIFN治療の効果

南 睦,山本 智恵美,大峠 和彦,前川 芳明,山本 慶和,松尾 収二
(天理よろづ相談所病院)

<はじめに>

近年C型慢性活動性肝炎におけるインターフェロン(以下IFN)治療はコンセンサスIFNや抗ウイルス薬であるリバビリンとIFN-2bの併用療法が保険適応となり、ウイルス量やセタイプに応じた薬剤の選択が可能になった。また再投与や長期投与も可能になった。今回、臨床検査データからIFN療法による効果を検討した。

<対象および方法>

対象は1996年から2003年の間に投与前のウイルス量およびセタイプが測定され、IFN投与終了後6ヶ月以上経過観察が行われた69症例を用いた。このうち、1996年から2001年の37例を旧IFN群、2002年から2003年の27例(初回投与14例、再投与10例、長期投与3例)を新IFN群とした。治療効果は投与終了6ヶ月時に判定し、著効はHCV-RNA(-)、ALT30IU/l以下、有効はHCV-RNA(+)、ALT30IU/l以下、無効はHCV-RNAの結果に関わらずALT30IU/l以上とした。

HCV-RNAの検出はアンプリコアHCV、アンプリコアHCV/Eニター(ロシュ・ダ

イグノスティックス)にて行った。

<結果および考察>

投与されたIFNは、旧IFN群ではIFN 2aまたはIFN 2b、新IFN群ではIFN 2b、IFN 2b+リバビリンおよびコンセンサスIFNであった。

初回投与の著効率は、旧IFN群ではセタイプ1で29%(5/17)、セタイプ2で69%(13/20)、新IFN群ではセタイプ1で28%(2/7)、セタイプ2で71%(5/7)と両群に差は見られず、治療前のウイルス量においても両群に差を認めなかった。

再投与10例はセタイプ1では8例全例が無効、セタイプ2では1例が無効、1例が著効で、長期投与3例ではALTが正常化しているのは1例のみであり、効果は認めなかった。

<結語>

新IFN群の治療効果は旧IFN群との差を認めず、また再投与例においても著効率は低率であった。

連絡先 0743-63-5611(内8408)